www.stsj.org

STSJ NEWSLETTER

A quarterly newsletter of the Sail Training School of Japan

日本セイルトレーニングスクール ニュースレター

Volume I, Issue 2

Autumn 2011

帆船『海王丸』
写真提供:独立行政法人 航海訓練所

Feature 特集

帆船『海王丸』遠洋航海 EQ* 調査レポート

先進テクノロジーに囲まれ、何一つ不自由なく暮らすことが当たり前になってしまった社会の中で、幾多の困難と不自由を乗り越えることによって、本来人間が持っている「人間力」を取り戻すための教育として、頑なに帆船航海にこだわり続ける人たちがいます。

それは、前時代的と揶揄され社会から注目を浴びることもないけれど、その教育効果を身をもって体験しているからこそ、何とかより多くの理解者を得て、次代を担う人材を育てる本当の人間教育の場を、より多くの青少年に提供していかなければならないことを深く理解しているからなのです。

今号では、多くの国民が関心を失いかけているけれども、海国日本の暮らしと経済を支える上で、なくてはならない「船」と「教育」の関係性を模索するとともに、帆船航海の教育としての有用性に気付き、教育の一環として文化にまで押し上げているセイルトレーニング先進国、アメリカのセイルトレーニング事情をレポートしていきます。

そして、寄付社会に向けてヨチヨチ歩きを始めた日本社会の中で、同じくヨチヨチ歩きを始めた私たちが、NPO 法人として今なにをすべきなのかを改めて考えていきたいと思います。

*EQ とは?
「IQ（知能の高さ）」ではなく、「心の豊かさ」を数値で捉えるのが EQ。この EQ を測定するモノサシが行動特性（コンピテンシー）です。

帆船『Ami』・セイルトレーニング in 駿河湾開催！

沼津の帆船『Ａｍｉ』（全長 17 m・定員 20 名）を利用したセイルトレーニングを開催します。今回は、富士山に抱かれ風光明媚な駿河湾を舞台に、日帰り航海を複数回、開催します。小型帆船のメリットを活かし、1 日の参加でも何かを実感して持ち帰れる運営を行います。また、今回は教育としての可能性を実体験して頂く為に、子育て世代・教育・報道・企業関係者の皆様の乗船枠もご用意しています。ご希望の方はご連絡下さい。なお、この航海は 1 口 3,000 円× 100 口募金の 30 万円で帆船の貸切をします。是非とも多くの皆様のご協力を宜しくお願い致します。

開催日時：2011.10/29, 11/13, 11/26
開催場所：沼津市静浦港発着
（現地集合・現地解散）
実施内容：舵取り・操帆・マスト登り・ロープワーク等、操船作業
対象者：中学生～大学生　各回 8 名
参加費：1,000 円
（保険代・昼食代等の実費負担）

帆船『Ami』

帆を操り、船を動かす。共に困難を乗り越えた力が成長の原動力になる。

～『海王丸』調査結果から見えてきた、「人間力」教育としての可能性～

航海訓練所・練習帆船『海王丸』遠洋航海に於ける、実習生の意識変化に関する調査報告

日本国の船員養成機関である、独立行政法人航海訓練所が運航管理する帆船『海王丸』は、船員養成訓練航海の中でも特に資質向上面で大きな成果が期待されることから、国内外を問わず帆走航海を続けてきています。私たちは、帆船による帆走航海自体が人間を成長させる機会につながる、という仮説を検証する機会として、(独）航海訓練所のご協力をいただき、帆船『海王丸』による遠洋航海に実習生として乗船する、商船大学生の帆走航海前後の意識変化に関する調査を実施しました。

航海関連技術（以下、「航海技術」という）の習得を目的とせず、「人間力」向上を目的とするセイルトレーニングと、航海技術習得を目指しながら同時に「人間力」向上も同時に目指す船員養成航海では、船上で実施される教育カリキュラムも全く違ったものだと思いますが、航海から得られる成果という点では、共通点が多いことが予想されました。今回の遠洋航海が私たちの目指すセイルトレーニングと異なる部分は以下の点です。

① STSJ が教育の対象とする一般的な高校生（世代）より年齢が 5 歳程度高いこと
② 汽船による航海や日常的に共同生活など団体行動を前提とした生活に比較的慣れていること
③ 内面的成長のみが目的ではなく、航海技術の習得という技術的な成長が大きな目的の航海であること

など、比較対象として議論すべき点は残すものの、10 代後半～ 20 代前半の青少年層を対象にした帆走航海、という前提条件に共通要因が多いことから、『CHEQ』利用による調査測定を試みました。

調査結果概要

『海王丸』遠洋航海概要
- 航海年月日：2011 年 4 月 9 日 ~5 月 8 日 (32 泊 33 日)
- 航海地域：東京 (晴海)~ホノルル (ハワイ)
- CHEQ 実施：4/7 東京　及び　5/7 ホノルル (下船前夜)
- 対象者：商船大学生 (航海科) 52 名
- 訓練内容：航海訓練所の教育カリキュラムに基づく

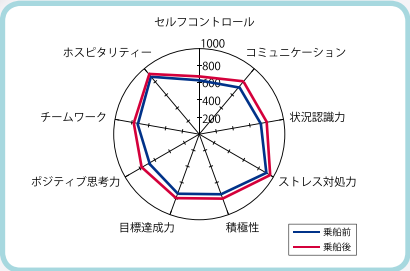
【1】実習生 52 名全体としての EQ（心の知能指数）は各特性がすべてにおいて向上しており、帆船による帆走航海が実習生の内面的成長促進に大きく寄与していることが考えられます。

全体の中でも高い伸びを示したのは、次のような行動特性です。

特に高い伸びを示した行動特性 (コンピテンシー)

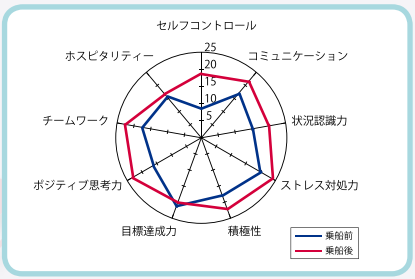
コミュニケーション
……対人関係において、良好な意思疎通が図れる能力…114.5%
ポジティブ思考力
……ものごとを肯定的・ポジティブにとらえる力…113.8%
セルフコントロール
……厳しい状況でも感情に流されず、冷静な対応ができる力…109.8%
チームワーク
……だれとでも信頼関係を構築できる、強調的な姿勢…106.5%
状況認識力
……周囲の状況を判断し、自分の役割を的確に理解する力…105.8%

このような行動特性は、長期遠洋航海の中で体験する幾多の困難を、仲間と力を合わせ乗り越えることによって生まれる固い絆や、成功体験を積むことによって生まれた自信などが、人間として一回り大きく成長する原動力になっているのではないかと推察しています。



上図のレーダーチャートで捉えた数値は、全実習生の総合粗点での平均比較ですが、これ以外にも個々の実習生の中からいくつか、実際の事例をご紹介してみたいと思います。

【 EQ の各特性で高い伸びを示した事例 】

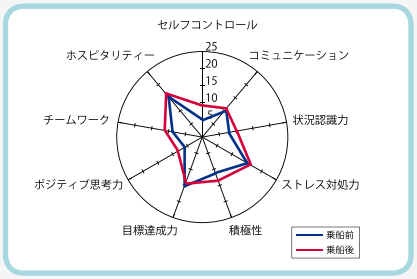


《推察》
乗船前からものごとを前向きに捉え、粘り強く努力し続ける内面的な強さと、周囲の仲間とも良好な関係を築く社会性を併せ持っていました。それが今回の航海で、自分自身の感情を上手にコントロールできるようになり、仲間との協調性が今まで以上に高まると同時に、積極性・プラス思考といった資質向上の基礎ともなる面での顕著な成長があったようです。

"One for All, All for One"

ひとりはみんなの為に、みんなはひとりの為に。

【わずかながらも EQ の各特性で伸びを示した事例】



《推察》
比較的ストレスに強くコツコツと努力を重ねるタイプですが、気分に流されることも多く、周囲と協調していくことはあまり得意としていないようです。しかしこの航海を通じて、感情に流されず周囲の仲間と力を合わせていこうと環境適応面で成長があったようです。

それぞれの事例に対する推察は、実際の航海に立ち会った訳ではなく「推察」の域を超えることはできません。しかし、乗船前のあまり不自由を感じることのない日常生活から、さまざまな制約を受けながら仲間と協調して共通目標達成を目指す共同生活へと生活環境が一変する中で、成長の度合いは違えども「EQ・心の知能指数」を伸ばす実習生が多かったと推測しています。

写真提供 (p.2~3) : 独立行政法人 航海訓練所
これら写真の著作権は全て(独)航海訓練所に帰属します。

【2】船員になるという明確な目標を持ち、日常的に共同生活にも慣れ、一般学生に比べて社会性に富む青年でも、帆走航海により半数以上の実習生に、EQ 面での成長が確認できました。

一般青少年を対象としたセイルトレーニングの実践を目指す私たち STSJ 内部では、商船学校出身者数名から今回の調査実施に対して、「既に高い社会性を備え内面的にも成熟している青年では、EQ 面での成長があまり期待できないのではないだろうか?」という疑問も一部上がってきました。それは、EQ の向上を目的に教育プログラム・インストラクター養成を行っている STSJ スタッフとしては当然の意見でしたが、ある意味では航海技術習得を最大目的として EQ 向上の為の特別なカリキュラムを持たない帆走航海で、どの程度の EQ 向上があるのか帆走航海自体のもつ教育効果を検証するためには非常に重要な機会になりました。

（独）航海訓練所が教育目的に掲げる船員に不可欠な「資質の涵養」という点において、

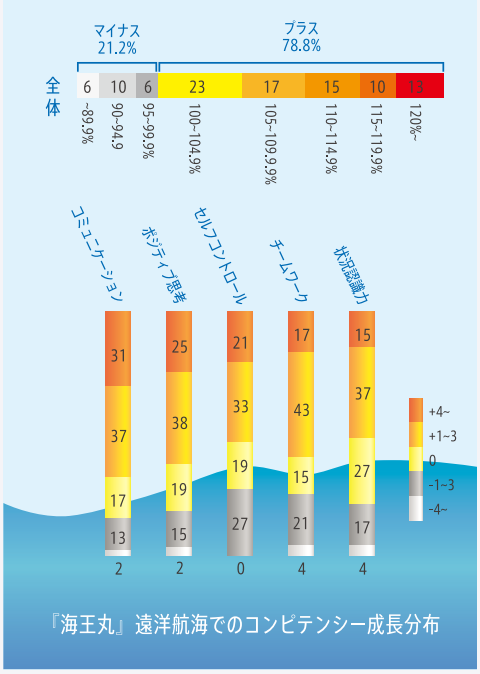
① 船という限られた空間で共通目標を達成するために協調してゆくチームワークスキル
② 複合的な危険予知・状況判断から適切な判断を下し、メンバーの力を結集し最後まで職務を完遂する強いリーダーシップ

を体得するために、気象条件に大きく左右される航海を仲間とともに乗り越える帆走航海が、大きく寄与していることが容易に想像できます。

今後、汽船による航海での意識変化を測定してゆくことによって、帆走航海と機走航海の「資質涵養」面での教育効果の違いが明らかにされるようになってくるのではないでしょうか?

【3】EQ（心の知能指数）の構成要素であるコンピテンシー（行動特性）は、「資質涵養」を目的に実施される、船員養成のための帆走航海の教育効果を測定する、モノサシになり得る可能性を有しています。

STSJ が目指す、10 代後半の青少年を対象としたセイルトレーニングの教育効果を測定するモノサシとして、暫定的に活用している『CHEQ』の設問内容でも、年齢的に 5 歳程度高い 20 代前半の青年に対する意識調査にも、適用がある程度可能であることがわかりました。



『海王丸』遠洋航海でのコンピテンシー成長分布

「社会性」が発達する青年期にある 10 代後半の青少年と、一定の社会性を身に付けた 20 代前半の青年では、感受性・社会的スキルも大きく異なることが予測され、設問内容への回答が航海体験の意識変化を正確に反映したものになるのかということを懸念していました。しかし、実際の回答傾向を確認していく中で、虚飾やいい加減な回答はなく、調査結果内容に関して一定の信憑性があると確信することができました。

今後は、セイルトレーニング・帆走航海実習など帆船を活用した航海から得られる「人間力」を測るモノサシとして、現在用いているコンピテンシーを基軸に、設問内容の見直しを行いながら、独自の教育効果測定＆フィードバックツールの開発を行っていくことも、同時並行的に行っていかなければならないと考えています。

セイルトレーニング先進国のチャリティー・ガラ参加レポート

まだ新緑が眩しい６月半ば、米国セイルトレーニング協会（ASTA）主催のチャリティ・ガラ（パーティー）が、アメリカズカップで名高いヨットの聖地、ニューポートで開催されました。ここに、ASTA ボランティア・インターン経験のある STSJ 理事の中山がボランティアとして参加。そこには、すでにセイルトレーニングが確かな教育手法として定着し、その支援の輪が確実に広がりつつある社会の姿がありました。

このチャリティ・ガラは、米国セーリング界を代表するセイラーであり教育者として著名な、ハリー・アンダーソン Jr. 氏が 90 歳を迎えたのを機に、同団体への寄附を元にした基金（150 万ドル＝約 1 億 1 千万円）の創設と、その卒寿を祝う、というものです。会場となったニューヨークヨットクラブ・ハーバーコートには超巨大なテントが設営され、同氏と親交の深い友人やヨット関係者など、350 人を超える支援者が全米から参集、その類い稀な功績と寛大な善意に敬意を表しました。

湾を臨む芝生の上ではカクテルが供され、お祝いムードが高まる中、日没の国旗降納式を合図にパーティーはスタート。数々のお祝いのスピーチをはじめ、巨大バースデーケーキの入刀、氏の胸像のお披露目サプライズ、そしてハイライトとなるチャリティ・オークションの開催まで、内容は盛り沢山です。

このイベントの狙いは、まずは普段セーリング競技やレジャーとしてヨットに携わる人たちに、ASTA の教育的な活動を伝え理解してもらうこと。そして、こういったパーティーやオークション等を通じて、楽しみながら社会との接点を見い出す「機会」と、自分にできることを考え実践する「場」を提供する。これがそのまま新しいサポーターや資金的な支援の獲得に繋がるというわけです。

会場のあちこちに設置された巨大スクリーンには、アンダーソン氏の ASTA 共同創設者などとしての来歴を伝える映像が映し出され、偉業の数々を紹介。終盤には、なんと氏自らシーシャンティーを披露して聴衆を沸かせる場面もありました。常に相手の気持ちを気遣うアンダーソン氏と、氏のお人柄に触れるホスピタリティがあふれ、とても清々しいひとときとなりました。

大成功裏に幕を閉じたチャリティー・ガラは、その証拠に、目標を上回る 40 万ドル（約 3 千万円）が集まったそうです。活動の志に共鳴してもらうだけでは、例年のファンドレイザー（資金調達のイベント）と比べ桁違いという額の寄附を集めることはできなかったでしょう。寄附したお金が実際どのように使われ、どう役に立ったのか、という事業運営の透明性が図られ、また、寄付者への感謝の気持ちをしっかりと伝えることができているからなのだと思います。そういう意味で今回、セイルトレーニングとは異なるも、「航海の素晴らしさ」という共通の価値観を持つ人たちと想いを共有し、支持を得られたことは ASTA にとって大きな意義があるのです。

米国では、セイルトレーニングと歴史・環境・野外教育などが一体になったプログラムを持つ団体が多くみられる傾向がありますが、これらの団体では小・中・高校の課外授業の選択肢の一つとして、デイセイルやドックサイド・プログラム等を提供しています。特にこうした教育機関との連携では、絶えず「どれだけ成果が出たか?」と結果を求められがちですが、その教育的価値の証明は「成績の向上」という学問的な成果に頼らざるを得ない側面も持ち合わせているのが現状のようです。

STSJ で現在行なっている EQ をベースとした教育効果の「見える化」は、従来成果を感想文という主観に依存しがちであった内面変化を定量的（客観的）に測る、という意味でその不足を補い、幅広い内容のセイルトレーニング・プログラムを支えるひとつの基準として、重要な役割を担うことができると考えています。

実際、参加のセイルトレーニング団体の当事者に私たちの教育効果の定量化の取り組みを伝えると、体験者の内面変化が一目で分かるレーダーチャートを見るなり、画期的だとの高い関心が寄せられました。

これまで 40 年近くに渡り、米国のセイルトレーニング界を引っ張って来た ASTA。その資金調達の最前線に直接触れ、私たち自身の活動の方向性を探る良いキッカケとなっただけでなく、EQ を用いた手法が示唆する可能性にも大きな希望を持つことができました。

今後は国内での活動に限らず、こうした海外のセイルトレーニング団体とも連携を図りながら、セイルトレーニング界全体の向上を見据えた活動の形を考えていきたいと思います。

ニューポートにあるASTAオフィス。かつては米英戦争の英雄・ペリー代将（日本を開国に導いたペリー代将の兄にあたる）の家で、国家歴史登録財に指定されている。

米国セイルトレーニング協会 (American Sail Training Association (ASTA)、通称 :Tall Ships America) は 1973 年設立。北米を中心に帆船運航団体の 200 隻以上の帆船が会員として登録する、いわば公益社団・財団の機能を併せ持つ組織。主な事業に、毎夏開催する「トール・シップス・チャレンジ」帆船レースを主催。また、国際舞台で米国を代表する公式なセイルトレーニング団体として、米連邦議会より任命を受け、ロビー活動から奨学金の提供まで、幅広くセイルトレーニングの普及活動を行なっている。

新しい寄附文化始まる

日本社会ではＮＰＯへの「寄付」がなかなか進みませんでしたが、それは寄付をしても税制面での優遇措置が受けられなかったという問題がありました。

それを解決するのがＮＰＯ法人から「認定ＮＰＯ法人」へのステップアップという方法です。

今年６月のＮＰＯ法・租税特別措置法の改正によりステップアップの道のりが拓けてきました。認定ＮＰＯ法人になると、

① ご寄付いただく方に対する減税が大幅に拡大！

② ご寄付いただく際に、安心して「想い」を託せるＮＰＯを見極めることができる！

③ ＮＰＯを運営する上で資金不足が解消し、より責任ある運営を目指すことができる！

というような、寄付者・ＮＰＯ法人双方にとっていくつものメリットが生まれます。

この認定ＮＰＯになるための新しいハードルが、ＰＳＴ（パブリック・サポート・テスト）という基準で、三千円以上のご寄付をしてくれる方が毎年百人以上いるかという基準をクリアすることで、言いかえれば活動趣旨と活動報告という点で多くの方が寄付を託してくれるか、社会からの審判を仰ぐというものです。

私たちＳＴＳＪも、これから認定ＮＰＯ法人へステップアップを目指すために、「三千円×百人」キャンペーンを始めました。（内容については『Ａｍｉ』セイルトレーニングでご確認下さい。）

私たちの活動を支え、ともに活動の歓びを分かち合えるような運営を目指して参りますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

[STSJ NEWSLETTER] Volume I, Issue2 ｜編集 + 発行 : NPO 法人日本セイルトレーニングスクール｜ 2011.10.1
特定非営利活動法人 日本セイルトレーニングスクール 〒220-0021 神奈川県横浜市西区桜木町 7-42 学校法人八洲学園内
TEL: 045-584-1920 ｜ FAX: 045-584-1921 ｜ E-MAIL: info@stsj.org ｜ BLOG: http://blog.canpan.info/stsj ｜ URL: http://www.stsj.org